1949年９月17日第三種郵便物認可　毎月10日発行　第655号（通巻1159号）　定価１部40円

創立1880年
東京YMCA
2008 4 月号
発行所　東京キリスト教青年会　発行人　新井廣和
135-0016　東京都江東区東陽2-2-20　電話　03-3615-5562
URL http://tokyo.ymca.or.jp

東京ＹＭＣＡの使命
東京ＹＭＣＡは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

We build strong kids, strong families, strong communities. YMCAは、たくましい子どもたち、家族の強い絆、支えあう地域社会を築きます。

喜び満ち溢れた輝く笑顔を子どもたちへ

東京ＹＭＣＡインターナショナルスクール・ＴＹＩＳ（東京ＹＭＣＡ国際学校）は、在住外国人の子どもたちのための学校として、１９９８年に開設。現在９ヵ国、年少児から中学１年生まで110人の子どもたちが在籍し、英語を共通語に学校生活を送る。東京ＹＭＣＡのミッションに基づき、子どもたちが言葉の共有だけでなく、異文化を理解しながら、真の国際人として、成長できるよう教育を行う国際学校である。
英語教育の専門家として長らく大学やラジオ放送などで活躍されている東後勝明氏（早稲田大学教授）を校長に迎え、「中学課程」も増設した。東後氏に、『英語を通したＹＭＣＡの青少年教育』についてお聞きした。（広報室）

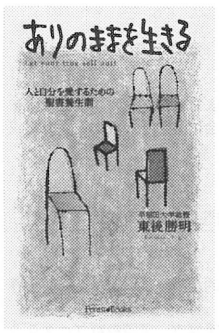
―はじめに、執筆や講演活動でご多忙な中、東京ＹＭＣＡでの働きをお引き受け下さった思いをお聞かせ下さい。

実は…早稲田大学進学時に、もし合格しなければ、ＹＭＣＡのホテル学校（現国際ホテル専門学校）へ行こうと思っていたのです。ですから、ずっと頭の片隅には、ＹＭＣＡという言葉が入っていて…（笑）。
その後、全国ＹＭＣＡの語学研修会に講師として呼ばれまして、『ＹＭＣＡでの語学教育について』ということだったのですが、ＹＭＣＡのスタッフの熱心さに驚きましたね。〝言葉〟を通して人を育む姿勢が伝わってくるのです。
そういうようにがんばっているな、という印象があって。本当の語学教育というのは、こういうものだ！ＹＭＣＡの英語教育はひと味違う！これこそが教育だと感じました。それからは、どこのＹＭＣＡでもお役に立てるのならと、熊本や奈良、大阪、横浜、埼玉、福岡など10ヵ所くらいでお話をさせていただきました。
東京ＹＭＣＡからお声かけがあった時、今までのＹＭＣＡとの積み重ねがあって、役立つのであれば教育関連でキリスト教団体での仕事をとの思いが合致したのです。これも私に与えられた召命と信じて、お引き受けしました。もちろん、校長としての働きは未知の世界でありますし、ある種の好奇心や不安もありましたが、「英語」「キリスト教精神」「国際的視野と感覚」などのキーワードから神様に導かれたのでしょう。ＹＭＣＡとは何か目に見えない〝つながり〟があると思っていました。

―ＹＭＣＡの語学教育、特にご専門の「英語教育」のあり方についてはどうでしょう。

『英語』について強いて言うならば、現代は社会全体の流れから、英語＝世界共通語になっていて、その英語が自国の文化と相まってひとり歩きしているような感がありますね。世界の人口が60億として、英語を話している人たちは４分の１の15億でしかない。さらに母語としているのは３億ぐらいでしょうか。英語は世界の共通語として、インドの英語があり、ナイジェリアの英語があり、今や純粋にどこかの国が英語のオーナーシップを持つことはできないでしょう。
「International」という単語は、「Inter-national」＝国と国の間にある言葉、というのが本来の意味ですが、英語は世界共通語でありながら各々の国の英語として話されているのです。無味乾燥な共通語でなく、その国の文化を背負っての英語でしょうか。これからは、英語の役割がどのように変化していくのか、誰にも予測がつきません。文化、歴史、環境もちがう人間同士のコミュニケーション手段としてあることを忘れてはならないでしょう。

東後勝明
早稲田大学教授
専門は英語学・英語教育。ＮＨＫラジオ「英会話」で長年講師を務め、好評を博す。キリスト教受洗後、牧会カウンセリングを学び、ことばが心に与える影響に深い関心を持つ。



『神から授けられた命には、ありのままで、そこに厳然と存在する価値がある』（本文より）

〝言葉〟は相手に物事や思いを伝えるための手段です。ただ言葉を覚えるのであれば、ロボットや翻訳機能で充分でしょう？ところがその〝言語〟という手段によっても、人が育っていく。内面が健やかに成長していくのですね。小さい頃からじっくりと地に足のついた英語を身に付けることは、同時に、人間として豊かに成長していくことを伴うことが必要なのだと思います。幼児英語といっても保育という視点をいつももっていることがとても大切です。
ＹＭＣＡとしてはその成長を見守るというか、そういう教育を行っていく〝基になるのが、『キリスト教信仰』ではないでしょうか。教材や教授法などは、教育を行う上でのツールであって、「与えられた命の大切さ」「隣人愛」と言った大切な事柄を証しや物語で伝えていくことが必要とされます。そういったＹＭＣＡならではの特色を取り入れることも期待しています。
もう一つＹＭＣＡにとって大事なことは、ＹＭＣＡの持っている国際性、そう、ＹＭＣＡと世界の関係＝全世界のネットワーク＝をもう一度見直して、世界とのつながりをしっかりと考えていくべきなのではないかと思います。

―ＴＹＩＳ（東京ＹＭＣＡ国際学校）は今後、ＷＡＳＣ（米国西部地域学校大学協議会）の認定に向けた審査を控えていますが、国際学校の校長として、またＹＭＣＡの青少年育成に関わる一人として抱負をお聞かせ下さい。

ＴＹＩＳは今年で10周年を迎えます。区切りでは10歳の少年ですが、将来に向けて更に飛躍させたいと思っています。ＹＭＣＡは、ＴＹＩＳの子どもたち、すなわちグローバルな視野をもった人材を世界に送り出す使命があります。特に、アジアのリーダーシップがもてるような人材を育成できる国際学校にしていきたいですね。それには、毎日家庭の中で子どもと接しているお母さんたちとこれまで以上に話す場を設けて、家庭と学校の両方から育てていくことが必要です。
ＴＹＩＳに限らず、ＹＭＣＡに来ている子どもたちはみんなすばらしい笑顔で迎えてくれます。館内で笑い声が絶えない。そういう風にどの顔を見ても、いつ見ても輝いていて、喜びに満ち溢れていることが大事なのです。子どもはそれぞれに個性があり、成長にも違いがある。そういったことを受け入れていく、周りの大人たちも笑みで受け止めていくことです。

東後氏がこの度出版された『ありのままを生きる―人と自分を愛するための聖書養生訓』（いのちのことば社フォレストブックス）＝写真＝は、暮らしの中のちょっとした出来事の中から起こる問題に、キリスト教信仰をもって向き合った本である。先生はこれまでに数多くの本を執筆されているが、伺ったところによると、英語関連以外の書籍ははじめてとのこと。
『神様の恵みに感謝して生きて行く〝想い〟を込めたタイトルにしました。私や私の家族が体験した試練や苦しみの中から紡ぎだされた織物のような、愛着のある本です。普段回りと比べてなぜ私だけが、なぜなぜと問うことが多いのです。しかし、神様から与えられた〝いのち〟なのです。だから〝ありのまま〟を受容することの大切さを伝えたい。そして、ひとりでも多くの人の手にわたり、日々の糧になれば嬉しく思います』と優しく微笑まれた。
『〝神様は見てくれているからこのままで大丈夫〟という気持ちをいつも持っていてください』。
東後先生から子育てただ中のお母さん方へのメッセージである。

総主事室から
信頼される存在であれ

◇先日、『不信時代、支えは家族』（３／21付朝日新聞朝刊）という見出しが目に飛び込んできました。記事は、「社会生活の基本である『信用』が崩壊しつつあるようだ」と語り、〝信用できる人や企業〟が多い、と回答した人は３割にも満たないと綴られています。私たち東京ＹＭＣＡが、地域づくりに「家族」を大切なものとして位置づけ、その働きを進めていることが同時に心に浮かびました。（本紙欄外参照）
◇過日、東陽町センターに、『我が子は同年代の子どもと少し異なるところがあるようだが』と、「発達障がい児クラス」を訪ねられた方がいらっしゃいました。その方は担当者が状況を伺い説明するうちに、長年心に鬱積した自らの不安な思いが伝えられ、『活動に参加しませんか』という誘いに心の負担の一部が氷解し、ＹＭＣＡに対しての信頼が従来にも増したと語られました。
◇不信の時代にあって、心に重荷を背負っていく人々がよりどころとする家庭を側面から支えるＹＭＣＡの働きを思う時、私たちの担ってきた役割がいかに重要であり、必要とされているかを感じます。私たちが多岐に亘って行う全ての活動が、あらゆる立場の方々と共にあり、ＹＭＣＡはこれからも、〝必要とされる方々に信頼される存在でありたい〟と強く思います。
◇「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」（ローマの信徒への手紙12章15節）。新しい年度も私たち東京ＹＭＣＡの役割を明らかにして、共に歩みを進めましょう。（廣）

＝公　示＝
第６回会員大会
日　時：2008年５月24日（土）
13：30～17：30
場　所：東京ＹＭＣＡ
東陽町センター
■お問合せ：会員部
ＴＥＬ　03―3615―5568

赤▽三角

時、まさに春である。ＹＭＣＡの在る、例えば国立の街並みを歩くと、桜の風が気持ちよく頬を撫でていく。あるいは、山中湖周辺を行くと、新鮮な、柔らかい緑の芽吹きに出会うことができる。新しさの季節・春は、自然界にだけやってくるわけではない。人にも、である。▼春を一番感じさせてくれる人、それは子どもたちに違いない。新入生・園児はなおさらである。道を行く足取りにも、不安、緊張感、期待、希望が入り混じり、ドキドキという鼓動が聞こえてくるようだ。年齢が低くなるほど、比例して保護者にも同じドキドキを感じて微笑ましい。新しい、初々しい姿には、「おめでとう」と、思わず声をかけたくなる。▼子どもたちは春の新鮮さそのものである。それは、おそらく彼ら一人ひとりが変化しているからであり、それに向き合う私たちが変えられているからだろう。同じ体験・経験でさえ、変化している主体には、新しいものとなる。成長とはこのようなものかもしれない。▼周囲に新しい出来事が多くあっても、自らの経験とか惰性の中でこれらを迎えるなら、私たちは新しくはならない。自らが変えられる時に、私たちは「いつも新しく」在ることができる。新しく生きること、それは子どもの時代の主題であるだけではなく、私たち「生かされている者」の主題なのだろう。時は春、イースターを覚える季節である。（Ｓ・Ｉ）